

GR  
白雲綱

みのり

地球愛護 平和観音

開山三十五周年記念号

34

昭和50年5月1日

宗教法人

鳥居觀音

# 表紙の説明

地球愛護 平和観音

高さ 15米

地球の直径 5.5米

平和観音像 3.5米

階段を上りきると見晴し台があります。

ここからの眺めは又格別です。

## 目次

表紙

道光禪師御法話（其の一七）

一

鳥居観音開山三十五周年を迎えて 四

西遊記（其の二七）岡部千三 九

田舎医者（其の一四）見川鯉山 十三

諸寄進、奉安の勧進

十六

觀音私讃

（山中久）十七

鳥居観音だより

十九

裏表紙



道光禪師  
（故高階瓏仙猊下）  
御法話

華と禪（其の十七）

わが禪宗は不思議に華との因縁につながつてあります。お釈迦様は四月八日、花の下で、お生まれになつて八十才でおかくれになりましたが、だんだんご老齢に向かわれますので、自分のあとをついで、仏法を相続していく者を定めておかねばならぬとお考えになりました。そこであるとき大衆の集まつたところで、以心伝心に釈尊の心境を受けとる弟子を求めようとなさつて、金波羅華（蓮華の一種）といふ華を手にもち、大衆の前に心ありげに示されました。それを釈尊の拈華と申します。そのときに一同は、如来（釈尊）はなにをいたされておるか、意味がわからず眺めておりました。ときに摩訶迦葉尊（まかやうそん）

者だけがその意味をくみとつて、につこりと笑みをもらされました。それを破顔微笑（はがんみしょう）といつております。そうすると釈尊は迦葉尊者のこの微笑をごらんになって、以心伝心（心をもつて心に伝える）仏法の命を迦葉尊者に伝えられたのです。

そこで釈尊は大衆に対して、わが正法、すなわち禪の命を相続するものは、摩訶迦葉であると宣言をいたされました。その時のお言葉がこうであります。

「われに正法眼蔵涅槃妙心、実相無相の法門あり、今われ摩訶迦葉に付ぞくす」

（華を見せて）に托して、仏法の相続者を定められたのでありました。

それから二十八伝して、禪宗の正統をつがれたのが達磨大師であります。大師は印度の方ですが、のち支那（中国）に正伝の仏法、すなわち禪を伝えるためにお渡りになりました。それを祖師西來といつております。そしてその宣言が、五言四句になつておられます。

いるのです。それは

第一句 吾本来此土：われもとこの土にきたるは

第二句 伝法教迷情：法を伝えて迷情を救う

第三句 一華開五葉：一華五葉を開けば

第四句 結果自然成：結果が自然に成る

というのであります。この意味は、自分が印度から支那（中国）まできたことは、釈尊正伝の仏法を伝えて、迷える衆生を救わんがためである。ではその釈尊の仏法とは、どんなことかというと、經典についての研究仏教は、早くから支那（中国）に伝わって研究されているが、わが釈尊から伝わっている正法の仏法というのは、文字について研究する理屈でも、理論でもなく、現実に即した大自然の原則、すなわち真理を悟ることである。その一例をいえば梅の花が開いたとする。梅には限らぬが、そうすると、そこには五べんの花びらがひろがつていて、それを一華開五葉と云う。そしてそのあとには、りっぱに実ができる。すなわち結果自然成といふのである。それには理屈も講義もない。ただ大自然

の真理を自得するのである。柳は緑、花は紅、その他一切の現象がみな真理である。それを自得するのが禅である。

それで達磨大師が華をもつて表明されたのが、今のが二句であります。

それから達磨大師の禅の系統を支那（中国）から伝承して、日本に曹洞禅として伝えられたのが、永平寺の開山道元禪師でありますが、道元禪師はもっぱら梅花の氣品を愛せられて、常に老梅樹をもつて、ご自分を表ぼうするものとされておつたのであります。ですから今、禅宗というは釈尊の拈華に始まり、印度から支那（中国）から日本へと、そのまま華との因縁がつながつております。まことに美しい象徴であり、まさに天地の間に美の表現を代表するものは華であると思ひます。

このように釈尊の誕生がまた花まつりとして伝わっているように、釈尊はルンビニ國の降誕より、伝法相続まで華から華で莊嚴されております。

（以下次号）

奥武藏名栗渓谷

宗教法人白雲山

## 鳥居観音開山三十五周年を迎えて

昭和十五年（一九四〇年）開山

### 信仰と健康づくりに結びついた靈場

今、奥武藏、名栗渓谷の雄大な自然の中に白雲

山、鳥居観音が、天下の靈場として又四季を通じて  
緑と花と水が行楽の場として、クローズ・アップし  
てきました。十年一昔と申しますが、本年は開山三  
十五周年を迎えるようになりました。お蔭をもちま  
して、法燈のもと、信仰の花は年と共に香り、実を  
結んで参りました。

期して本年は記念事業として、地球愛護、平和観  
音、落慶開眼式が挙行され、その意義を一そう深  
くすることができます。

開山以来、春秋の二季には例大祭を挙行し、一万  
体觀音、一万巻写經の供養も併せ行い、夏の塔婆供

養、流灯供養も年次盛大になつてきました。ちなみに  
に開山以来、その歩みを振り返ってご参考に供した  
く存じます。

平沼桐江先生作 聖觀音 二、三〇米

聖觀音落  
慶、開眼

式

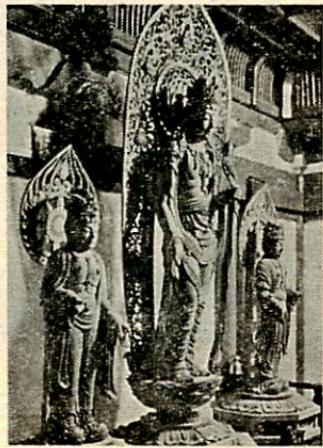
昭和十五年  
四月開祖平

沼先生ご夫

妻が、ご母

堂の遺言を

確守せられ今の大黒殿に聖觀音、梵天、帝釈天を祀  
られました。



地蔵堂と子育地蔵尊 昭和十七年春完成

お堂は檜

の節材、地

蔵尊は根元

一本彫、安

産、子育地

蔵尊として

信仰厚く、

お願い、御

礼参りが多

い。

仁王門と仁王尊 昭和二十七年完成

落慶開眼式、錦秋の好天に恵まれて挙行、導師は平林寺、峰尾大休老師。

檜丸柱と屋根のなだらかな反りにうつとりする。



総高一、五〇米



本文堂  
第一

昭和三十三年完成  
昭和三十四年完成  
増築



阿像 総高三米

屋根のプロンズの天女、  
堂内七觀音の華麗、  
天井の花の絵画は一流の  
画伯の筆によつて優雅と  
いうのみ、扉々窓の硝子  
も特殊な色彩です。

本堂 玄奘三蔵塔 昭和三十五年完成

この塔は開祖平沼先生ご夫妻の情熱の発路から、中央政界、財界から、千余名に及ぶ方々の奉讚によって完成し、塔内に玄奘三蔵法師と釈尊の靈骨が安置してあります。

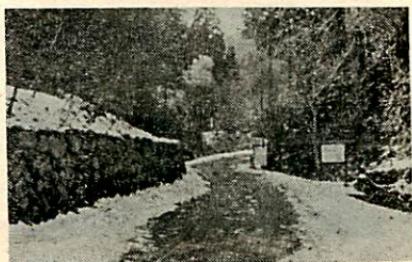
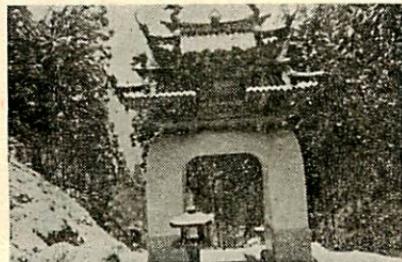


玄奘三蔵塔法要



焼香参拝者

玉華門 昭和四十三年完成



参道

講中及参拝者の休けい所として親しまれてる。

庫裡 昭和四十三年完成



東京福徵講新妻様ご一行

## 救世大観音

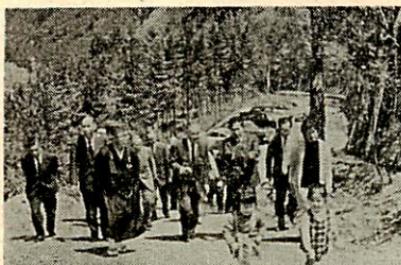
昭和四十六年完成

落慶開眼式は秋に挙行、全山紅葉の真盛り好天にめぐまれ、多数の参拝者を得て盛大に挙行できました。

御導師は岩本勝俊禪師及多数の老師と地元梅花流御詠歌奉詠に嚴肅、式終了と共に、打ち上げられた花火の音は谷にこだまし、放たれた無数の風船は秋空高く舞い上った。



式場へ行く人々



## 写経塔

昭和四十八年完成

秋深く、清涼全山にみちた十一月落慶式挙行、納経數拾万巻はゆっくり納めることができます。

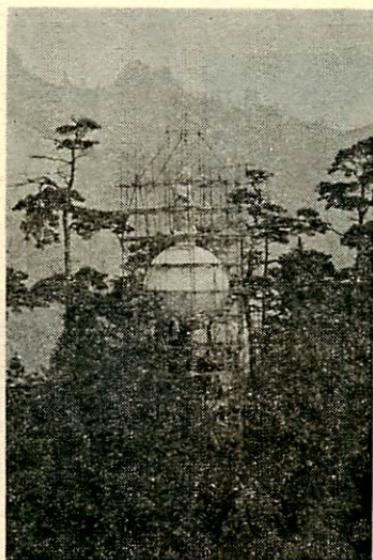
救世大観音近くそして、壱万体観音が奉安してあるのに対し、この写経塔が建立されたので一そう信仰の意義が深まつてきました。



写経塔落慶式の状況

地球愛護平和観音 昭和五十年完成

春らんまんの花の中で、その名も平和観音、地球愛護の大精神で建立されました。小林老師を導師として、盛大でした。



により天地自然を征服する思想が芽生え、天

も地も、山川草木、ごとごと汚染、破かれを見るに至った。これは神仏をおそれない行為であり、洪大な天地の恩徳を無視するものと云うべく、このままに推移するならば、地球はやがて、くつがえ

され、人類の絶滅は必然である。

私はこの現状に鑑み、地球愛護、平和観音を建立し、天地自然と共に、人類の繁栄を祈念するものである。何卒この悲願を永久にご加護あらんことを。

昭和五十年四月十五日

平沼桐江

とみ



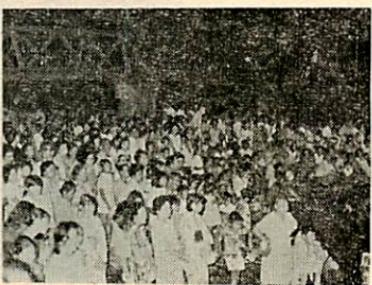
地球上の人類は天地と共に一体となって生活の発展をなしてきた。近時科学文明の急速な進歩、革新

悲願文

とみ

## まとめ

以上のく如、三十五年の間一途に観音信仰を通じて仏像の彫刻と堂宇建立に魂身をこめて実現されました平沼先生ご夫妻の偉大なお力は何人にも出来な



夏の夜の流灯法要

## 交通案内

これからは益々道路の拡張と共に交通網がひらかれて、都心からこの地に訪れる人々が多くなります。すでに青梅市の成木を通つて小沢峠のトンネルを抜けて名栗への道が完成しましたし、名栗から秩父への道も開けて、最適のドライブウェイとなりましたので、その途中この救世大観音がはるかから見られます。

入山、拝観、御祈禱（交通安全其の他）もできます。

また庫裡で休けいもできます。

かりますよう、信仰への道を各自おひらきくださいますよう御願いします。

また庫裡で休けいもできます。

どうぞお気軽にお立よりくださいましてごゆづくりと本堂参拝、山内探勝をいただけたら幸です。



# 西遊記

(其の二九)

岡部千三

百姓たちも、わっとよろこびの声を上げ、国王も、法師の力に深く感心した。

はぎしりしてくやしがったのは、虎力、鹿力、羊力の三人で、あわれであつた。

「国王さま。」と、虎力仙人が、王の前に進みでて

云つた。

雨ごいくらべ（前号につづく）

そこで、法師は、だんにのぼって、何やらぶつぶつとなることをはじめた。

一方悟空は、もう一生けんめいに力一ぱい、

「さあ、いまだ、たのみますから、風の神さま、

雨の神に云いつけて、すぐさま、雨をふらせてくれ

され。」

その時びゆうと、風が吹いてきた。たちまち雲がひろがって、その間から稻妻がしたと思う間もなく、ガラゴロガラゴロと雷が鳴つて、ぽつりぽつりと、すばらしい大雨が降ってきた。

「ふつた、ふつた……。」

八戒と悟淨は、とびあがって、よろこび合つた。

「一度だけでは、どちらが正力かわかりません、もう一どやらせてみてください。雨ごいではこの通りましたか、こんどは、けつしてません。」

「と云うと、どんな力くらべをしようと云うのか。」

「座禅くらべはいかがでしょう。」

座禅といるのは、からだを動かさずに、同じ処にあぐらを組んでいることで、坊さんの修行のひとつになつてゐる。

国王は、三人の仙人と三藏法師とに、

「では虚力仙人の申した、座禅くらべをやらせることにしよう」と、座禅くらべを云いつけた。

法師は、また心配になつて、

「わたしは、座禅では負けないつもりだが、これは、ただの座禅ではないようだ。だいじょうぶであろうか。」と悟空に、こつそりと耳うちをした。

「ご心配はいりません。この悟空がついています。国王の云うとおりにしていらっしゃいませ。」

悟空は、法師をげんきづけてから、あいてのようすを、ゆだんも、すきまもなく、見つめていた。

### 仙術くらべ

座禅の場所は、仙人たちがつくっていた。つくえを五十つみかさねた、見上げるような高い段上である。

それが、東と西に、二つ並べてつくられた。

虎力仙人は身をひるがえして、西の段上にのぼった。法師はと眺めやれば、これは悟空が雲にばけて法師をつつみ、ふわりとうかべて、東の段上にのせた。

いよいよ、座禅がはじまつた。

こんどこそ、何がなんでも虎力仙人にかたせなく

てはと思った鹿力仙人は、首すじの毛を南京虫にして、東の段の下から法師のあたまに、はじきとばした。

ちくりちくりと、南京虫は法師のあたまに、くいついた、でも、体をうごかせば、法師のまけになるので、かゆいのを、じつとがまんしていたが、そのつらいことと云つたら……よういなことではない。下からそれをながめた悟空は、

「鹿力め、やつたな、ではこつちもやるぞ。」

とつぶやくが早いが、むかでになつて、虎力仙人のあたまにはいあがり、あたまをちくり、鼻の下におりて、くちびるをちくりとさした。

「あつ、いたい。」

思わずさけんだ虎力仙人、高い段の上にいることもわすれて、とびあがつたからたまらない。地上にもんどりうつておちてしまつた。

「どうやら、勝負はあつたようだ。」と国王が云つた。

「おまちください。」と鹿力仙人が、口をはさん

だ。

「虎力仙人は、きゅうに病気がおこったのです。

病気には、だれもかてません。これは本当の勝負とは云えないでしよう。今度はわたしがかわって、術

くらべをいたしましょう。」

「お前は、何をしようと云うのだ。」

「千里眼で勝負しましょう。」箱の中に品物を入れ、それをあてっこをするのです。」

「千里眼とはおもしろい。三藏法師もやつてみるか。」

「はいけっこうです。」

法師よりさきに、悟空が答えておいて、法師に、そつとつぶやいた。

「お師匠さま、だいじょうぶですよ。悟空にまかせておいてください。」

国王は、木箱になにか入れさせて、部屋の真中へ

もちださせた。

鹿力仙人が、じっと見てゐるあいだに、悟空はもう小虫になつて、箱にもぐりこんでいた。

箱の中には、赤いおぼんがあつて、その上に、女の着物がのせてあつた。

「なんだ、こんなものか、よし、鹿力のやつをおどろかしてやろう。」

ふつと、つばをはきかけて、

「ころもになれ」と、となえると、女の着物は、ぽろぽろのころもにかわってしまった。

「お師匠さま、あいてが何と云つても、あなたはこう云つてください。古いぽろぽろのころもだ、と、

「よろしい、お前の云うとおりにしよう。」と法師はうなずいた。

「では、ふたりとも、中のものを云つてみよ。」

国王のことばに、鹿力仙人がまず口をひらいで、赤いぼんの上に、きれいな女の着物がのせてあります。」

ひづいて、法師が口をひらいた。

「赤いぼんの上には、ぽろぽろの古いころもです。」

「ぼろぼろのころもなどがあると思うか。」

国王は氣げんをわるくして いた。

「箱をあけて、法師にみせるがいい」と云つた。

「はつ」とけらいが、箱のふたをとると、女の着物ではなくて、法師のことばどおり、古いころものが、赤いほんの上にのつていた。

「ややつ、これは。」

おどろいたのは、国王ばかりではなく、鹿力仙人はくやしまぎれ、いまにも、法師にとびかかるうとした。すると、そこへ、また虎力仙人がすすみでて、

「法師や、悟空は、まほうで、品物をすりかえたにちがいありません。もう一度、おためしくださいますようねがいます。」と云つた。

「なんどためしてもおなじですが、おうたがいでしたら、どうぞためしてみてください。」

「あたま切りに、腹切りか、油のふろもだいすぎだ。では、おさきにごめんください。」

悟空は、首切り台にあがつてしまつた。

首切り役人が、刀をふりあげて、

「えいっ」と、一声。

悟空のあたまは、ころりと前へおちて、ころころ

ころと、ころがつた。けれども悟空はたおれない。

「あたまよ、あたま、こつちへこい。」

どこかで声が、たしかに悟空の声が、みんなにきこえた。

悟空は、自分の術で、あたまをよびもどそうとした。

ところが、鹿力仙人が、そのじやまをはじめて、あたまを、はたとにらんで、じゆもんをとなえると、うごきかけた悟空のあたまはびたりととまつてしまつた。

見ていた三蔵法師は、はつとした。八戒も悟淨も、きがきではない。

(以下以号)



# 田舎医者

(其の十四)

見川鯛山 挿絵 おおば比呂司

大先生（前号より）

その返事をまだ私が考えていたら、先生が云つた。

「どうだね、わからねえか。僕が云いてえことはだな、こんな美味げな柿がだ、実は食つてみつと、かくん如くまずい。すなわち人間に於いてもだ、善人そうな面をした奴が、案外、悪い野郎だつてことだ。そしてその反対にだな、人相のよくねえのがいい人間だつたりするつちゅうことヨ。どうだ、今度アわかつたべ？」

浪花節がぐつと顔を近づけて私に訊いた。するとますます犬臭い人相のよくない顔だった

「ン、まあね」

私が、もじもじしながら先生を見たら、  
「ふん。まアだ君ア本当にわかっちゃいねえ、そ  
の顔じやナ。だが、もういい」

と、早いとこ私に見きりをつけてむつりと黙りこんだ。そして先生は忍術使いのようにふところから手を出して、もう一つの、しまつておいた方の柿を惜しげもなくポンと道端へ捨てた。

「そりああんた、もともと渋いんだよ。その柿は」

申し訳なさそうに私が云つたが、先生は返事もないで、色あせた紋つきの肩をゆさぶり、裾の切れた袴でバサバサと埃を立てながら威張つて歩いた。浪花節が、なんだつてこんな山の中を歩いているのだろうか？ことによると彼は、那須温泉の宿屋へ

稼ぎにやつてきた旅芸人かもしね。でも、それにしては歩きかたも喋りかたも堂々と立派で、勤王の志士みたいだ。だがいま時、勤王の志士なんか現われる筈がないのだ。私はこの不可解な男がなんとなく気にいり、そして、にこにこしながら付いていった。

「なア、君イ」

突然彼が云つた。

「君ア、さつきから僕のあとをにこにこしながらついて来るが、いったい君ア何者だナ？一寸見ると学校の先生のようだが、そうじアねえな。とするとオ……、役場だな君ア。なあそだらう、どうだ、びたりだらうが。」

勤王の志士がふところ手でそっくり返えり、勝手にそきめて偉そうに言つた。

「村長に見えるのかな、やつぱり？」

先生の真似をして、私も反り身になつて威張つてやつたが、失敬にも彼が吹きだした。

「ブフッ!! いやそりや無理だな。村長っていう

貫禄じやねえや。ま、なんば良くて係長つてとこだ。そうだ、君アその、衛生係長だらう？」

「へえ、なる程ねエ。これは驚いたな」

「いやあ、別に驚くにア及ばねえのサ。おめえは少し薬臭えのだ、俺の鼻ア胡麻せねえからな」と、肉の厚い不恰好なその鼻を、まだヒクヒクと動かしているのだ。そしてそばかりではない。この勤王

党みたいな浪花節あたりは、もう官軍の隊長にでもなつたかのようすつかり威張つて私に云うのだ。

「おい、ところで係長。俺はこれから北条の三七郎という奴の所へ行くんだが、おめえその家を知つてるか？」

「三七郎の家なら、実は私もそこへ行こうとしているところなんだよ。」

「うん、そーかそーか。そりア誠に結構といいうもんだ。じアひとつ、俺をそこへ案内しろや。いいな!!」

「ああいいともサ、どうせ一緒なんだもの」

心よく私が引きうけてやつたら、浪花節がゴール

デン・バットをたもとから取り出し、一番よれよれの奴を一本くれた。私がにこにこして、それを口にくわえると、その巻煙草は紙ばかりで中身が半分も入ってないのだ。だが、浪花節は言つた。

「俺は人をただでは使わん、それが俺の主義である。しかし、炎が煙草の紙へ燃えうつり、私の鼻の頭がきな臭い匂いをさせても、今度は浪花節の自慢の鼻はそっぽを向き、そして知らん顔で言つた。

「係長、おめえはナンだな、三七郎の病人とこへ消毒に行くんだろ。ン？ そのでけえ鞄見れアひと目でわかるな。実ア俺、その病人を治してやりにはるばるやつて来たんだ。」

「おお？ ジアあんたは医者だつたの……」  
びっくりして私が云うと、先生がカラカラと笑つた。

「医者だと、バ、バカな!! 医者で治せるもんなら俺がこんな山ん中まで来んでもいいのだ。アッハッハッハ」

先生は、腰に両手をあてて、そっくり返つて笑う

のだ。だからあっけに取られて私は考えていた。さてな。いつたいこの人はなんだろう？ とにかく浪花節かたりでも医者でもない。そして、彼は昔、幕末時代の映画に、たしかこんな男が写っていた。

このままの姿で刀を差せば高山彦九郎にそつくりだが、いまどき彦九郎が出てくるわけがないし、まして勤王の志士が柿など盗んで食うはずもない。」

「おい、係長!!」

突然、大先生が私に言つた。

「何をおめえ、さつきからモソモソ考へてるんだ。さつさと案内しなきア駄目でねえか、まだ、それで、だいぶ遠いのか七三郎の家ア」

「いやア、もうそこだ、そこの家がそうだよ」

(以下次号)

# 諸寄進諸奉安の勧進

平地和觀音 建設費の勧進（現在三三〇万円）

四月十七日に落慶開眼式が盛大に挙行されました。今後共よろしくご協力ををおねがい申し上げます。

**壱万体觀音奉安の勧進**（現在八、四四三体）

壱体 A 金壱万円  
壱体 B 金七千円  
先祖代々永代供養勤修  
壱体につきご仏壇奉安の小禮音一体をさし上げます。

**壱万卷写経納経の勧進**（現在七、三三八卷）

写経壱巻金 壱千円  
お一人で何巻でも結構です。  
尚御申込によりお届けもいたします。

写経の本は般若心経の折本で、文字の上を写せますので、当山本堂でも写経できます。

尚御申込によりお届けもいたします。

**参道大灯ろう寄進の勧進**（現在四三基）

壱基 金参拾万円

参道に赤の大灯ろうが、すでに二十三基と逐次建立の運びとなっています。ご協力下さいませ

**壱万体觀音奉安者芳名**（現在八、四四三体）

港 区	目 黒 区	入 間 市	入 間 市	住 所	芳 名	住 所	芳 名
占 内	滝 伊 上	内 吉 田	内 紀 美 子	山 本 峰 子	滝 トキ	山 本 峰 子	2
部 川 沢 藤 田	野 伊 佐 雄	3 8 2 2 2	佐 久 間 真 治	宮 田 光 子	鈴 木 茂 子	3 8 2 2 2	2
恵 千 鶴 子 達 豊 三 郎	一 栄 一	齊 藤 定 次	小 川 文 雄	三 ノ 宮 菊 枝 博	田 島 静 子	田 島 静 子	2
以	豊 三 郎 夫	3 2 10 4	田 边 広 瀬	3 2 10 4	牧 野 陽 子	3 2 10 4	2
上 福 岡	入 間 市 山 形	京 青 梅 市 都 横 濱 村	池 田 大 助	森 田 善 三 郎	廣 瀬 秀 雄	2 3 5 5 30	30
小 沢 孫 高 小 山 直 井	坂 田 谷 田 峰 田 久	鶴 孝 龍 久	か ジ マ ニ	2 3 5 5 30	大 助	2 3 5 5 30	30
子 孝 美 雄 治 ね	一						

# 白雲山 鳥居觀音和讚

作詩

山中 久

## 名栗川

ひるがえす、旅の衣ははるけくも、八雲わきたつ

秩父なる、そびゆる山に、わきいでて、月の入るべ

き武藏野の、紫匂う藤袴、入間の里の名栗川、末は  
いすこへ入間川、なれぬ浮世にもまれては、名を荒  
川と変えども、色には染まじ墨田川、心有間の山峠  
に、しばし流れる静けさは、昔ながらの杉木立、檜  
の山や杣人の、通いなれたる山路の、九十九折にも

咲き乱る、四季の眺めは面白し、ここは浮世の名栗

川、底すみ渡るざざれ石、巖となりて千代八千代、

苔のむすまで今の世の、武陵桃源と云うならん。

## 春

有間山より風吹きて、名栗の谷も青芽ぐみ、春夏  
秋と変りきて、冬をすぎれば立返る。春の景色の美

しさ、水もぬるみておちこちの、山も煙りてかすみ  
立ち、伊豆ヶ岳より陽炎えば、柳さくらをこき交ぜ  
て、織りなす山のあやにしき、さくらかざして遊び  
けん、大宮人の古事も、昔語りの佐保姫の春の車も  
行き難みて、さぞや日数を重ぬらん。

## 夏

夏ともならば白衣の、衣干すちょうどひらち山、岩  
間をもるる岩清水、滝の白糸布引きて、谷のせせら  
ぎ音たてて、河鹿鳴く瀬におちかかる、夕べとなれ  
ば山峠に、螢飛び交い夜もすがら、鳴かぬ螢が身を  
こがす。

## 秋

秋ともなれば、月冴えて、山の端より端に入る、  
深山紅葉も色増して、もゆるが如く、照り映えて、  
維茂鬼（いもじおに）を討たずとも、挙げて見はまし盃の、色まで

紅く染むと云う。

## 冬

冬来りなば鵠の渡せる橋に、里時雨、三ツ四ツ五六ツの華、蕨山より訪れて、二子山より薄化粧、峯の松風音絶えて、琴を枕の長き夜や、鷺毛の飛ぶにまかせては、谷から谷へ縋ぼうし、よしやすだれをかけずとも、香炉峰にはさも似たり。

## 白雲山鳥居観音

さても名栗の山峠に、まします鳥居観世音ゆかり

を問えばあなかなし、幾世をかけてここに住む。有縁の長者亡き母の、悲願を込めてかしこみて、魂心のわざ血をそそぎ、一つ刻みて三礼し、府仰天地の奉仕にて、年月重ね刻み上げ、白雲山と名づけたる、十方清淨景勝の靈地に安置たてまつり、鳥居観音と、となえける。それ本尊は聖観音、十方世界照

果あり、げに頼むべき一条の功力とてとは知られけり。

我一日を訪れて、かかる奇特に入間川。真葛が原の末路の世の身を恨みてや、明けくれの、五障の雲を払わんと、しばし祈念をささぐれば、不思議や、誦経の声澄みて、本有の靈光忽ちに、身を包みしは極楽の、弥陀誓願の來現と、成道法悅を覚えたり。ほんのう消えて解脱得て、不思議の奇瑞現われて、

仏果菩提に到るべし、げに有がたき結縁や、げに有がたき利生かな。

この時虚空に花降りて、靈香四方に薰じきて、迦陵頻迦の声馴れて、光りのどけき久方の空の彼方に天少女、月の桂の身をうけて、春鶯囀を奏しつつ、羅綾の袖をひるがえし、舞うやけい裳羽衣の曲、ひらりひらりと舞い下りて、いらかにこそはとどおりぬ。

かかる奇瑞にめぐり逢う、げに有がたき值遇かな、げに有がたき値遇かな。

合掌

民安らけく、九品蓮華のうてなには、歎喜微笑の仏

## 鳥居觀音だより

祈祷の終了は十二時、直ちに庫裡で、とそこに代る般若湯をくみながらご歎談いたしました。

一月十七日 月例法要

終了した行事 昭和五十年元旦祈禱 十時

役員各位のお骨折りと、篤信の方々のご協力によりまして、新年行事として、最も大切な元旦祈禱は

その本旨であります。信仰を祈禱に結集されまして、その数も年々増加いたし、誠に感謝にたえません。御関係各位に厚く御礼申し上げます。

例によりまして導師は小林老師外有馬、鯨井両老師により、献茶湯、淨香、祈禱文、焼香と青春の気の満つる中、げんしゆくに執行されました。

この日、ご参拝の方々は恒例によつて、川越原田様のご一行、斎藤様の御一家、東京の佐藤様、青梅の荒井様、飯能平沼様を始め一般参拝の方で正月の気分もみなぎりました。

二月三日 節分会 十五時

鬼は外、福は内の豆時も、導師、小林老師によつて取りおこないました。ご仏前におそなえした、袋

月例法要にも、新年祈禱を御申し込みの方が見えまして、沢山の祈禱札の申し込みをうけた。中には電話でお子様の病気平癒の申し込みをうけたのもありました。電話口での声は涙ながらのお願いでした。早速願旨氏名を書いて、小林老師にお願いしました。

小林老師はそれを聞いて、そのように心懃こめてつとめられた結果、數日経つて電話でおかげ様で、快方に向つて退院するとのことで安心しました。信仰と云うことは一時的な氣休めのものでないことも知りました。電話で依頼された方は常々信仰をもつておられるため、その心が祈禱に通じ、病人が快方に向われたのだ信じます。

入りの福豆を参拝の方々に分与いたしました。おかげで福德円満、家内平和でくらせます。

三月十八日、春彼岸の入りに本堂広間に、朝霞市の広瀬季雄様から緋のじゅうたんのご奉納がありました。お蔭様で堂内が一層広く見え、七觀音様の美しさが一段と輝やいております。

四月一日、つづじまつり開始

学校も春休みになつたので、毎日参拝かたがた花や緑を求めてのグルーブや、家族ぐるみの来山があつて連日にぎわいました。

梅、さくら、みつ葉つじ、山吹、椿、れんぎょう、雪柳等百花咲き乱れた白雲山はまさに一大花園を開きました。

四月十七日、開山三十五周年記念、春季例大祭と

地球愛護平和観音落慶開眼式挙行

篤信各位、講中、一般来山者多数のご参列で盛大に執行することが出来ました。

幸いにつつじが真盛りだったので、多くの方々によろこばれました。

## 夏の行事と山のお知らせ

五月八日、月おくれ花まつり 十一時

白雲山の花は紅のつつじが盛りとなります。

五月十七日、十一時 玄奘三藏塔、救世大觀音、毫万体觀音、写経塔法要を執行します。

花と新緑が皆様をおまちしています。

七月十六日、施餓鬼塔婆供養 午後二時

裏表紙にご案内がありますのでごらん下さい。

八月十六日、流灯法要 午後五時

夏の白雲山は緑一色で、山のあち、こちから老鶩の、声が終日きこえます。

樹の間を吹く風も涼しく、別天地です。

名栗川からは河鹿のなく声もきかれます。

第三十四号 発行日 昭和五十年五月一日

とりゐ  
編集兼

埼玉県入間郡名栗村

鳥居観音

岡部

千三

発行人 印刷所

浦和市仲町二一八一十五

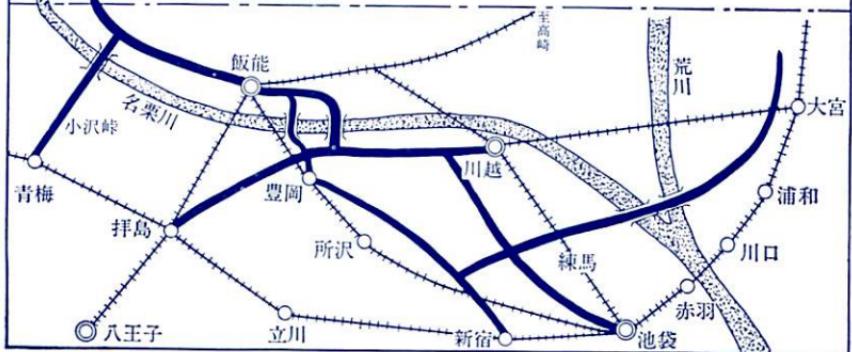
武州印刷株式会社

発行所

鳥居観音 電話

〇四二九七(九)〇四一七番

# 白雲山 鳥居觀音 案内図



## 夏の行事のご案内

### 施餓鬼塔婆供養

- 7月16日 午後2時 救世大觀音前庭に納めます。
- 供養料 1本 1,000円以上
- 申し込み 7月10日まで

### 流燈法要

- 8月16日 午後5時 本堂  
ご先祖様諸靈の供養をして、当夜名栗川  
へ流灯します。
- 供養料 1灯 1,000円以上
- 申し込み 8月10日まで

### 花火大会と盆踊り大会

- 8月16日 午後7時より

### 秋彼岸法要

- 秋彼岸中
- 御申し込所 埼玉県入間郡名栗村  
白雲山 鳥居觀音  
電話 04297(9)0417